

『吾輩は猫である』 偵察

Junko Higasa 2015.11.23

人間の愚かさを見ていながら、言葉で訴えることのできない吾輩は、紙面にて大衆に訴える手段を得た。第三章までくると、己が猫である事は漸く忘却してくる。そこで太平の逸民(官に仕えない民間人)の境遇に立って、本格的に社会へ発信し始める。

前章で、羅馬人のように利を貪っても、放出する手段を持たなければいずれ国病を抱えると予測した漱石は、本章で、強欲のためにローマ滅亡の運命が記された本の結末部分しか入手できず、対策を講じられなかったタークウィン・ゼ・プラウド(王政ローマ第7代最後の王 Lucius Tarquinius Superbus ルキウス・タルクィニウス・スペルブス)を取り上げ、日本の運命についての自己提言へと読者の意識を誘導する。そして人の一生を考える「空間論」を基に、存在としての人間の公平性を問う。

それから鼻子を登場させるが、英語の鼻(nose)には「警察の手先・スパイ」という意味がある。鼻子が行なうのは、寒月君の情報収集と、苦沙弥先生の言動妨害である。鼻子は軍事開発を担う科学者の動向を探るが、力学が解らないので要領を得ない。そこで金の奴隷にならない逸民を圧迫するにとどまる。吾輩が誰よりも寒月君のために偵察に出かけるのは、軍事で儲けようとする金田君を阻止し、科学の悪用を避けるためである。一方、苦沙弥邸の窓の外には犬がやって来るが、迷亭が逆手を取って対抗する。